

# 畏敬の念

—— 自主独立の人となるために ——

前 重 細 重 大 学 教 授  
国 民 文 化 研 究 会 理 事 長

小 田 村 寅 二 郎

〔畏敬——崇高・偉大なものを——かしくまじり敬うこと——「広辞苑」〕

一、今日の私の話は、『日本への回帰——第十九集——』に載つてゐる昨年の夏の雲仙での話「国家は文化の単位である」の「続き」と思つて聞いてください。

「世のため、人のため」。「修身」「齐家」について。「治国」「平天下」について。  
シドニーの海軍葬。「国家」の定義について。「天皇」について。

—— 昨年の講義の内容 ——

二、この合宿に来てをられる助言者のお一人で、二十七歳の高校の先生が申込書の裏面のアンケートに書いてくださった中の言葉「学校教育の現場に身を置いてゐる者として今痛切に思ふことは、生徒に「私」を越えて生きた人々の生き方を教へること、正しい国家観を身につけさせる必要がある、といふことです。生徒はそれを渴望してゐます。」

三、サンケイ新聞五九、五、一四「正論」欄、佐伯彰一氏「腰を据え神道の意味を考えよう——偏見、反感にすぎない未開宗教論——」

日本人として、神道の意味を腰をすえて考えるべき時期ではないだろうか。

「心のふるさと、日本の心情の原点」といった言い方を、いきなり持ち出さうとは思わない。しかし、神道は日本根生いの宗教というばかりか、不思議な生命力をはらんでいて、幾多の変転を耐えしのぎながら、現在も決して死に絶えていない。いく度か外来の大宗教の攻勢に圧倒され、滅びかけながら、もっぱら受け身の、一見かばる力をふるって、わが身を持たせ続けてきた。

たしかに古めかしく、頼りなげな弱さを時折露呈しながら、今も正月の神社参詣から、季節ごとの祭り、さらには伊勢や出雲まいりまで、思いがけぬほど深く、われわれの生活のうちに融けこんでいる。お盆ごとの帰郷や墓参なども、その根をたどれば、神道に行きつくたろ。

起源は仏教にあつたにせよ、この習俗を、これほど根深く、幅広く持続させてきたものは、すでに教義のワクを越えている。身近な死者の思い出をいたわり、死者たちとの絆をたしかめようという神道的な「魂」感覚とつながっている。

しかし、現在のわが国で、神道に対して、かくべつ烈しい偏見、反感がゆき渡つてゐることも、明白な事実である。これを無視して、知らぬふりですませる訳にはゆかない。

神道に対する反感、偏見は、おおよそだつて二種類にわけられる。

一つは、戦前、戦時中の「国家神道」に対する毛嫌い、また警戒心である。神道は、戦前のナショナリズムと手を結んで、軍国主義推進に大きな役割を果たした。

こうした神道悪玉説は、戦後のわが国では、相当な普及度を示している、もしかしたら、戦後意識の一部と化しているともさえいえるかも知れない。

しかし、これは神道の誇大視、また買いかぶりであり、さもないれば、悪意ある中傷にすぎない。

(中略)

もう一つの有力な反対派は、「進歩的」を気どる左翼、とくにコミュニストだ。宗教は「人民の阿片」であり、わが共産主義は、国家も宗教も廃棄する、と。

そこで、マンチ神道の訴訟など、大がいこうした左派が一枚かんでゐる次第だが、共産主義こそ実は世俗的な擬似宗教、裏返された絶対神信仰に他ならぬことは、今も明らかになりつつある。硬直したイデオロギー、絶対神信仰から解放された神道の良さ、強味に思いをいたすべき時期だといいたい。

サンケイ新聞五月十四日に、佐伯彰一氏が「腰を据え神道の意味を考えよう」という一文を書いていられる。これは私も日頃気になつてゐる事なので、私なりの所感を記してみる。――

神道は一神教ではない。最後の命令を発する權威がない。絶対の根拠になるものがないから曖昧なあやふやで祭天の古俗にすぎないとて、これが何か疚しい劣性のあらわれであるかに漠然とながら思われている。一神教――キリスト教側――からの圧迫がつよいのである。

およそ客観世界には絶対不変のものは存在しない。絶対とは砂漠の民が信じはじめたものらしいが、その砂漠の中ですら砂丘もオアシスも生物も……変化してゆくし、何より嬰兒が青年になり、ついに老い衰えて死ぬ。朝の紅顔夕べの白骨の歎きは、同じことであろう。ただその外界の変化のテンポがのろく、くりかえしが目立つので、恒常の感覚が生れやすく、人間のそれへの欲求が満足されやすい。恒常不変はただ人間の思念の中のみある。絶対の唯一神とは、人間がおのれの欲求にしたがつて想像力で描きだしたものである。

（中略）

一神教では絶対者は強力な超人のごときものであつて、人間はただその命令に服従をする。その正体がいかなる者であるかは問はず、たとえそれが相対的な妬む者であつても、力をもつて復讐されるのが恐ろしいから、（復讐は我にあり。我これを報いむ）、それを最後の絶対者であると仮定して固定する。そして、それに対して畏怖をもつ。

われわれ東洋人は、最後の絶対者の正体は知りたいたいものであると感じている。形のない輪廓のない超絶者を定義することはできない。しかし、われわれはこのはかない生の中にいて、無限絶対な永遠なものへのあこがれと希求をもっている。それで、なにごとのおはしますかは知らねども

忝なさに涙こぼるる

ということになる。これが絶対者に対するもつとも正しい態度であろう。

（中略）

超越する一神はいないけれども、**畏敬の念**はあるのだから、何かきわだつて人心にショックをあたえるものは、みな崇拜の的になつた。社会に功績のあつた人物、崇りをするかもしれないものは祭られた。東郷神社、乃木神社はもとより、戦後には湯川神社をつくろうという話まであつた。こういうことは古代ギリシアにもあつて、エウヘメリズムといったそうである。ギリシア神話では花から怪物まで神化されたが、日本でも山川草木が生を通じあつた。遊女が桜の精であつたり、狐が忠信であつたりした。ビグマリオンも左甚五郎も自作の人形が生きて恋人となるが、この一致は偶然か。何かの機能職能を促進する守護神のごときものも祭られた。人間の幸福に寄与するためであろう。宇治のほとりには離縁をつかさどる神社があり、そこに願をかけると夫婦別れがらくにできるのだそうである。こういう類のことは読んだ記憶はあるがよくは知らない。もう一つよく知らないことを。――出雲大社や諏訪神社の世襲の官司は、現人神とよばれていた。つまり神を祭るすぐれた人をそう呼んだので、これをアメリカ占領軍はエホバの生れかわりかと思ひがちだそうである。

よく神道には神学がないといい、これが神道の弱点であるかに暗示される。しかし、日本にも神学があり、宣長その他が大成した。和辻哲郎先生の「尊皇思想とその伝統」のごときは、立派な神道神学を含んでゐる。もともと信仰と理論とは別なものであり、神学とは信仰を正当化するために後からつけた理屈であり、キリスト教でも

いよいよ窮すると、「非理なるが故に信ずる」などというふうである。

もつと宗教に縁があるのは芸術であろうが、これは問題が大きくなりすぎて片鱗にもふれることができない。共同体の感受性は変らないものらしく、ようやく落付いてきた現在日本に作られるものには、簡明、清浄、むだのなさ……といったような神道の造形が蘇りつつあるように思われる。あたらしいメカなどに、「天から降ってきた建物のような」伊勢神宮や神魂神社などの感覚がひそんでいる。これに反してキリスト教のシンボルが異教徒のわれわれに同感をあたえなくても当然であろう。十字架はキリスト教徒にとつて強烈な情動を生むものであることは分るが、あのホテルの寢室にもかかつている着ざめた血まみれの自虐的なキリスト磔刑像は気味がわるい。あれとそっくりなものを焚殺映画で無数に見た。

日本の神学は、

あらたうと青葉若葉の日の光  
に集約できるかもしれない。

アニミズムという言葉にはある価値観が含まれているが、それを離れて考えると、日本人が現代の機械技術を使って作り出した映画作品——の羅生門や雨月物語その他はみなアニミズムの世界とその中に流転する人間の運命といったようなものを表現して、まことに独特である。そしてその世界の深き広さを示している。

ハーンがはじめて出雲で目醒めた朝に、米をつくく白のひびきや橋をゆく下駄の音を聞いて、これが世界のリズムだと感動したのは、西洋のすべてにゆきわたった人為的統制の金縛りを出て、自然の懐に浸ったことを自覚したからだ。

あまり「腰を据えた」考えでもなかつたが、私は神道をだいたい右の方向に考えた  
く思っている。

## 五、「五箇條の御誓文」(明治元年—一八六八—三月十四日)

- 一 廣く會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ
- 一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ
- 一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦ザラシメン事ヲ要ス
- 一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ
- 一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ

我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ

朕 躬ヲ以テ衆ニ先ンジ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努

力セヨ

註\*經綸||國を治めとのへること

\*官武一途||官吏も軍人も一すぢの道に進み

\*皇基ヲ振起ス||國の基礎を一そう強固にする

\*國是||國家の基本方針

## 「教育勅語」の全文(明治二十三年十月三十日)(一八九〇)

朕惟フニ我が皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我が臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世歐ノ美ヲ濟セルハ此レ我が國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ボシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ是ノ如キハ獨リ朕方忠良ノ臣民タルノミナラズ又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我が皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スベキ所之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

註\*惟フニ||よく考へてみる

\*國ヲ肇ムルコト宏遠ニ||最も遠大な御理想をもって、この國を

おひらきになられた

\*徳ヲ樹ツル||ここでの「徳」は、國民に対して御恵み深いお心

で相対せられること、そのお心を堅く確立せられたこと

\*億兆||すべての國民

\*世世||美ヲ濟セルハ||昔から今日まで忠孝の美風を立派にう

けついできたこと

\*德器||德行と器量とを總稱した語で、道德的品性の意

\*一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ||一たび國家の一大事が起つたと

きは、正しい勇氣を振り起して國家のために尽し

\*之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ||これを昔から今に至るまでのいつの

時代に行つても、間違つてゐないことであつたし

\*之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ||國內のみならず國外、すなはちすべ

ての諸外國において行つても、決して人間の道に反するといふ

ことになら

\*拳々服膺シテ||つゝしんで捧げ持つやうに、片時もその身に離

さずに固くこれを守つて